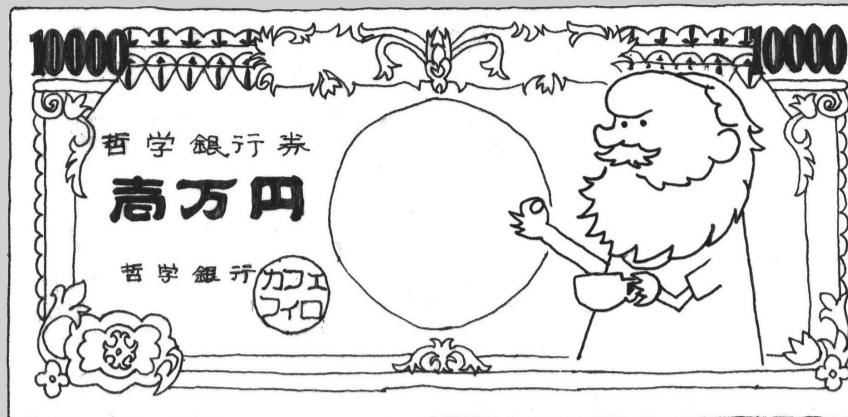


哲学 喫茶

特集 お金を問う



Le café chez Socrate : s'il eût été au goût du jour, toute la face du monde philosophique aurait changé.

vol.2
2006.11

CAFÉ PHILO (カフェフィロ) とは

大阪大学臨床哲学研究室のメンバーが中心になって、2005年4月に発足した団体です。カフェと名前がついていますが、どこかに実在する喫茶店ではありません。カフェという言葉には、いろいろな人々が集まり、リラックスして語り合う社会の中の場所という意味がこめられています。わたしたちは社会の中、カフェのような身近な場所で、他人と対話し、ともに考えを深めることのお手伝いをします。

哲學すること、それは一部の専門家、偉い学者先生のものではなく、社会のなかで生きるすべての人々のものです。難しい言葉や高度な知識は必要ありません。忙しい日常のなかで少し立ち止まり、他人や自分の言葉にあらためて耳を傾ける余裕さえあれば、誰でもが哲学的対話に参加できます。

カフェフィロでは、さまざまなテーマで「哲学カフェ」と呼ばれる哲学対話ワークショップを中心的活動として行っており、そこには老若男女さまざまな方が参加してくださっています。それ以外にも哲学対話セミナーや、絵や映画、ダンスを言葉で鑑賞し、考えを深めていく「アート哲学カフェ」、こども向けのワークショップ「こどもの哲学アトリエ」、高校への出前哲学授業なども行っています。

また上記活動以外にも、社会の中で行われているさまざまな対話推進・支援活動や教育機関を含め社会のなかで哲学を教え、伝える人たちともネットワークを作る、哲学や対話についての研究会、シンポジウムを開催するなどして、社会のなかで実践することに取り組んでいきます。カフェフィロは「社会のなかで生きる哲学」のあり方を探り、それを実現するとともに、哲学とともに生きる人たちをサポートする組織です。

What is CAFÉ PHILO?

Café Philo was organized in April, 2005, with the leadership of the members of Clinical Philosophy Department, Osaka University. Though it is named 'café', it is not a real coffee shop you would find in town. We mean by 'café' a space where citizens from different backgrounds get together and talk to each other in a relaxing atmosphere. Our mission is to help citizens to talk together and to deepen their thoughts together in a comfortable space like a café.

To philosophize is not only for experts or professors but for all who live in the civil society. Bewildering jargons or sophisticated pieces of knowledge are not necessary. Anyone who can find time in busy everyday life to stop to think and who tries to listen to others and him/herself can be engaged in a philosophical dialogue.

Café Philo's main activity is providing philosophical dialogue workshops which are called 'Philosophical Café', where many people, young or old, men and women, actually come and enjoy. Besides, we hold philosophical dialogue seminar, 'Art Café', where we look at and talked about pictures and paintings or dancing, developing reflections, and 'Philosophical Atelier for Children', which is a workshop for children, and we also deliver philosophical sessions to classrooms of junior and senior high schools.

To sum up, Café Philo is an organization which pursues the way of 'philosophy living in the society' and practices it, as well as assists those who are living with philosophy.

お問い合わせ CAFÉ PHILO OFFICE
〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科 本間講師室
office@cafephilo.jp
www.cafephilo.jp
常時会員募集中！

特集 お金を使う special issue Much ado about money

カフェフィロ初の全国規模のプロジェクト始動！？先頃、神戸、大阪、広島、東京など、哲学カフェが定期的に行われている地域で、「夏の特別企画」と銘打って「お金を問う」という統一テーマでの哲学カフェが開催されました。今回の「哲学喫茶」では、それぞれのカフェの参加者がお金についてどんな議論を繰り広げたのかをご報告します。参加者や地域が異なれば、お金に対する考え方も異なるのか、それとも我々の頭を悩ませるお金の問題はどこへいっても同じなのでしょうか。読者のみなさんも、どうぞコーヒーハンズにそれぞれの議論の参加者と一緒に頭をひねってみてください。

CAFÉ PHILO holds "Philosophical Café" regularly in Osaka, Kobe, Hiroshima and Tokyo. We planned a series of discussions at these different places on the theme of "Questioning Money", which was one of major topics for Japanese people in 2006. This issue reports how people made much ado in thinking about money.

神戸 地獄の沙汰も金次第!? Money opens all doors !?

KOBE EAST

今回会場となった神戸では、ほぼ月に一度のペースで哲学カフェを開催しています。開催場所は「喫茶 JUN」もしくは「Café P/S」のいずれか、参加者の世代は20代から80代までと非常に幅広く、毎回10名前後の方が足を運んでくださいます。6月18日(日)は、「お金すべて解決できるか」をテーマに「Café P/S」にて開催。10名の方といっしょに対話をしました。

進行役としては、最近マスクをいざなった株取引にまつわる諸々の事件に対する反発や、お金がなくて困るといった日常的で情感的な話からはじまるのではと想像していましたが、哲学カフェに慣れた方が多いせいか、その手の話は一切なし。はじまりからさまざまな意見が行き交う中で、みんなの興味をひいたのが、ある参加者から出た「お金の交換機能」の話。確かに、お金を出す以上何かと交換している。なるほどお金で「解決できる」ということは「等価交換できる」ということではないか、と同意する意見。

ある参加者がぱつり、「地獄の沙汰も金次第」。そういうふうに宗教でもかなり交換関係があり込んでいるようです。「戒名もお金によってランクが決まっていますよね」という意見。「お布施をとらない宗教は成立のだろうか?」「お賽銭を入れずに神社をお参りするよりも、入った方がなんとなくいいですよね」など、実際にさまざま。確かにお金を払うことで、死者があの世でいい暮らしができると思えたり、罪意識が楽になったり、その人がいなくなった悲しみすら和らいだり、いろんな意味で何かと交換している。こういう場面ですらお金が力をもつたから、現世ならなおさら。「でも交換という問題がすべてなのだろうか?」という問い合わせが投げかけられ、話はお金で〈交換できないもの〉に移ります。

ある参加者からこんな例が出来ました。「家の近くにある居酒屋の梁は、店主の曾祖父がその昔乗っていた漁船の一部が使われているそうです。この梁は、お金では買えませんよね。」「お金を出して新しい梁に交換したら、機能は変わらないけど歴史性や意味が変わってしまいますね。」「何かしみついてきたものががれ落ちるというか・。・。」と同調する声。ではそういうものを〈かけがえのないもの〉と一緒にするとして〈かけがえのなさ〉とは何でしょうか?と進行役の問いかけに、参加者の一人から「いつかなくなるって意味じゃないでしょうか」という意見が出来ました。

広島 お金に倫理は必要か? Do we need ethics about earning money?

HIROSHIMA

広島哲学カフェ(2006年8月5日開催、於:広島市東区民文化センター)は、「お金に倫理は必要か?」というテーマになりました。少人数(8人)ながら、大学院生・倫理学者・キャバクラ勤務経験者・会社経営者・サラリーマンなど多彩な顔ぶれで始まったカフェは、時を忘れて三時間、熱のこもった対話を展開されました。その一部をのぞいてみましょう。

「私には二人の子供がいるが、子供がこれいくら、これいくらとよく言う。お金を気にせずに、これが欲しいと素直に言えよと思う。どこかで私には“お金が汚い”という意識があるのかもしれない。」

「それは“お金が汚い”というより“お金より大切なものがいる”と言いたいのでは。」

「そう言いたいのかどうか分からぬが、ただ漠然と、いらいらしてしまう。」

「嫌悪感みたいなものですか。でも、それが倫理につながるかどうか分からぬ。」

「倫理があるとするならば、お金それ自体ではなく、お金の稼ぎ方の良し悪しが当然考えられる。そこで“お金に倫理は必要だ”と言えるのでは。」

ここから、お金を稼ぐことに対する良し悪しの問題が、スルドイかたちで提起され、参加者が身を乗り出して発言し始めます。カフェが「哲学」し始める瞬間です。

「私も倫理はあると思う。ただしそれが必要かどうかということは別。お金の稼ぎ方をめぐる倫理観は、私のアリティでは非常にうとうしいものだ。稼ぎというと、侮蔑の目が入る。そんな悪いことはやめなさいと言われる。結局、良い悪いという文脈の中で“生活のためにお金を使う”という現実は切られている。」

「それは外からの目ですか。自分の中では感じていない。」

「自分の中では感じていないが、他人から言われれば言われるだけ、自分の中に内面化されて、悪いことをしているという感じになります。」

「僕は内面から出てくるものがある。ビジネスマンとして莫大な資材を使って環境破壊をしてといった罪悪感がある。経済システムって良いものじゃないと。周りは疑問を持っていないけれど・・・。」

「私は外からだけれど、あなたは内面(良心)から、というのが面白い。でも良い悪いに関係なく、お金は

「老いておさらばすることが織り込み済みのこの世の中で、全然老いずに不老長寿であるとすれば、健康は〈かけがえのないもの〉ではなくなるわけです。」ふむふむ、確かにかけがえのないものは、ある種の危機感みたいなものに寄り添うゆえに、いくらお金を積まても手放したくないのかもしれません。

「しかし〈かけがえのないもの〉によっては、お金で積まれた額や時間の経過、環境や立場の変化により考え方が変わることもあり、交換可能なものになってしまってはいえませんか?」「だから、どこに交換不可能の基準を置くかで、すべて解決するともいえるし、すべて解消しないともいえる」さらに話はおよび、「ある意味では、お金である程度交換できるようにしてきたことが人間の知恵なんでしょうね」「金で解決できるのならばその方がいいのではないか?」という意見がでてきました。

お金と交換するものが何か(=何に対してお金を払うか)により、「お金すべて解決するか」という間に、解決可能/不可能がわかる。しかし、現代社会の傾向として、伝統や意味、感傷的な思いなどにお金を絡めたくない気持ちは理解できるが、結局のところその気持ちもお金で解決できるのでは、という雰囲気はあったように思います。「でも、いまのところ〈自分の身体〉だけは交換不可能ですね」「本当にそうなのか?」「確かにそうかも」身体についていろいろ話はじめたところで、残念ながら時間がきたので終わりとなりました。

最後に進行役として、今回のテーマは「お金すべて解決するか」でしたが、この間を深めるために途中でも一度問い合わせを立て直す必要があったように思います。参加者のみなさんも気を使っていたので、こんな切り口はどう?といろいろ助け舟を出してくれたにもかかわらず、私の理解能力の遅さゆえうまくみ取れず全体的に停滞した部分もあり、テーマを掘り下げるというよりも横にスライドしたような印象があります。

(進行役、報告:樺本直樹)



写真は神戸「喫茶 JUN」でのカフェの模様です

Money opens all doors !?

Our philosophical Café was held in Kobe on the following topic: "Can everything be solved with money?" The title above is cited from one participant's remark in discussing the exchange function of money. In his view, many Japanese believed people would be saved from sins and sufferings in this world, thus enabled to make good living in the next world, if they contributed money for Sinto shrines or Buddhist temples. It showed the powers of money through exchange to keep a peace of mind. But is it true? Is everything exchangeable for money?

Some participants objected to that idea because there were many value which could not be reduced to money: history, meaning and memory of our belongings. Yet another participant maintained that such values might be exchangeable for something else on some condition whereas my body would be not.

The point was the limit of exchange with money and the discussion around it lasted more than two hours.

(Reported by N.KASHIMOTO)

勝手に動いているという側面がある。みんなが悪いと思いつつも、お金は回っているという現実がある。進行役はここで、良い悪いに関係なく回る「システムとしてのお金」と、良い悪いに関係する「行為としての倫理」との違いを整理し、さらに議論を促します。

「売春で稼ぐのは“悪い”と言うとき、お金と愛を交換するのはおかしいというお金に対するイメージが間に挟まっている。それと経済活動で環境破壊をするのは“悪い”と言うのとは、少し違うようだ・・・」

「例えば“NGOで働いています”と言うと、すごく良いイメージを持たれる。売春はその逆。」

「やっぱり稼ぐ方に良し悪しがあるということなのかな。例えばゴルゴ13が殺人で報酬を得るのは悪い。」

「イメージとしてはかっこいいけど。」(同一、笑)

「売春や株で稼ぐことを人が非難するとき、“お金に対するイメージ”が関係していると思う。殺人で報酬を得ることは少し違う。」

「株取引で一時間に一億円儲けるのは悪い、一時間で千円儲けるのはまあいい。お金の量はどうなんだろ。」

「社会的に共有されているお金の稼ぎ方の程度みたいなものがあるんじゃないのか。」

「売春は、一定の程度を超えているということ?」

「そのとき、ねたみとか人格を傷つけるという理由だったから分かる。でも、お金と倫理とが結びついている点では理由にならないのではないか。」

「非難する理由が、お金それ自体ではなく“お金に対するイメージ”なら関係ある。お金はすごく多様なイメージを持っていると思う。」

時間が来ますが議論は白熱するばかりで、結論は出そうにありません。「システムとしてのお金」と「行為としての倫理」の間に、それを結びつける「理由」があること、それは(お金それ自体ではなく)「お金に対するイメージ」に関係していること、こうしたことを確認してカフェは時間切れとなりました。

(進行役、報告:堀江 剛)

The philosophical Café in Hiroshima began with the question "Do we need ethics about earning money?"

First, the participants discussed about the fact that various moral feelings or estimates are twisted around some occupations, for example prostitution is presumed to be immoral, NGOs assume morally good image, and so on. Through the discussion, the difference was realized between money as a system, which works independently of the moral, and ethics concerned with particular human action. But the participants did not agree to completely separate them from each other, and proceeded to discuss from which viewpoint these two things can be connected again under the keyword 'image of money.' The whole discussion lasted over three hours, however, we could not reach a conclusion.

(Reported by T.HORIE)

神戸 幸福の値段 Does Money make us happy?

KOBE NORTH

月に一度、育児サークル（グリーングラス）のメンバーが集まる、「お母さんの哲学カフェ」。参加者の間心に沿ったかったので、問い合わせは進行役が提案するのではなく、当日募ることにしました。「お金はたくさんあつた方がいいのか?」「貧富の差はなぜ生じるのか?」「生きたお金の使い道とは?」「お金で手に入らないものはあるか?」「貯金はすべきか?」などの中から全員一致で選ばれたのは、「お金があつたら幸せか?」。

前半は、幸せに関する例が挙げられながら、議論が進みます。

「昨日、子どもと作ったドーナツがおいしくて、しあわせ～って思った! お金がなくても幸せを感じることはできる。けれど、お金があれば治る病気もある。ってことは、お金で買える幸せもあるってことかなあ。」「物質的な幸せはお金で買えるかもしれないけど、精神的な幸せは買えない。お金で気持ち買えないし、生理的に受けつけない人とは、いくらお金があつても結婚しようと思えないし、お金で結婚を決める人なんて・・・・いるかも!」

「幸せの形態は人それぞれ、価値観によって異なるのでは? お金を得るために本を書く人もいるのに、お金を払ってでも本を出版してもらいたい人もいる。」

「でも、人間が生きていくうえで必要な基本的な衣食住が成り立たなかつたら、やはり幸せとは言えない。価値観は、衣食住というベースの先にあるもの。」



写真は別のテーマでの「クリーングラス」でのカフェの模様です

「そのベースもどのくらいが最低限かは、人によってちがう。それはやはり価値観によるちがいのでは?」

こんなやり取りから、問い合わせの答えは「幸せの形態はその人がもつ価値観によって様々であるし、ひとりのうちでもいくつかの形態をとりうる。そのうちのいくつかはお金によって可能になるが、いくつかはお金とは関係ない。」に落ち着きました。

後半は、幸せに関するお金の特性について考えることに。自然と参加者が協力して進行役の問い合わせに答えるかたちになります。

「お金がある状態とない状態では、何がちがうの?」

「お金があることによって、国家ができる!」

「国家?! いきなり大きく出ましたね。」

「物々交換だったら、たとえばディズニーランドの入場券をかぼちゃ1個と交換しても、かぼちゃ10個と交換しても、双方が納得すればいい。けれど、そうではなくて誰もが等価で買えるっていうのが、国家が成熟してる証拠だと思う。」

「なぜ、かぼちゃ!? というツッコミはさておき・・・・お金だと誰もが等価で買うことはできるのはどうして?」

「お金があることによって、モノの価値がみんなにわかる。モノの価値がわからなかつたら、ジュース1本を得るために何がどれだけ必要かわからない。ディズニーランドなんて、かぼちゃ何個もっていけばいいのかわからない。」

「なるほど、お金には共通尺度としての役割があるということですね。でも、そのことと幸せとの関係は?」

「お金なら、自分の価値観に応じた選択が可能になる。100円もってたら、100円のモノなら何でも買える。」

最後によく、「価値観」を要に、「幸せのあり方は価値観によって異なる」という前半の議論とのつながりが浮かび上がって、参加者一同ほっとしたところで、タイムアップ。

残念ながらお金との関連が述べられずに流れてしましましたが、この日は他にも「幸せ」について面白い論点がいくつか挙がりました。まず、「幸せとは変化の狭間に見え隠れするもので、持続性がない」という意見。お金はその変化を生じさせる手段となるかもしれません。また、「幸せと欲望が満たされることとは同じか?」という問題に注目した人もいました。「お金によって欲望がすべて満たされれば幸せになれるような気がするけれど、本当にそうなのかな? 不満だからって不幸ってわけでもない。不満はあるけど幸せなこともある。」と。この方向で考えていくと、お金で欲望を満たすことはできるけど幸せはお金とは関係ない。と、今回出した答えとは別の答えに行きく可能性があります。最後に進行役から以上の点を指摘して、この日の哲学カフェを終えました。

(進行役、報告: 松川絵里)



Women who have small children meet together to enjoy the philosophical conversation every month since 2003. In this "philosophical cafe for mothers", they asked a question: "Does money make us happy?" Their discussion started from talking on what happy life was like for them. "The happiness depends on one's own values." "But eating, clothing and housing are basic needs for the happiness." "Money is one of means to realize one's happy life." "But what is money for us?" "Money is common scale for values." "And its relation to the happiness?" ...Time was up!

(Reported by E.MATSUKAWA)

大阪 若者の金銭感覚

OSAKA

Young people, independance and money



In Japan today, it is one of the social issues that many young people are economically dependent on their parents. Most of the Japanese students are supported and fed by their parents and some of them do not start to work after high school or university but instead live with their parents, being unemployed or part-time workers.

The main theme of the philosophical cafe in Osaka was "money and independence". The participants started with talking about the relationship between the parents and their children in the context of money: they discussed how much money parents should give their children and how young people learn the right way to spend money. Through this discussion, participants came to focus on "responsibility for spending money". Some participants argued that the responsibility included anticipating and taking on the results of their spending, while others commented that it was difficult for young people to be responsible, surrounded by the excessive commercialism and malicious consumer finance.

(Reported by A.TAKAHASHI)

2006年7月28日に開かれた、大阪での哲学カフェのテーマは「若者の金銭感覚」。大阪市立中央青年センターという場所柄もあって、仕事を探したり、働くことについて考えている若者や、それを支援する人、親などが関心を持って参加できそうなテーマにしました。二十代の大学生、大学院生や仕事を持つて働いている三十代の人、その親の世代の人、年代も背景もばらばらな人が15人ほど集まり、カフェはスタート。

簡単に参加者の自己紹介をしている時に、ちょうど親の立場で大学生の子どもの金銭教育について悩んでいたという方がこんな悩みを切り出しました。

「親は子供にそんなに家にはお金がない、ちゃんと働きなさいと言っているのに、子供は自分が豊かな家に生まれていて、いくらお金を使ってもやっていけるのではないかと思っている節があるんです。ねだればいくらでももらえるような感覚でいる気がして。これって、子供の将来の為になっていないのではないか不安です。」

この実感のこもった悩みに対して、共感して一緒に考える人、違う立場から意見を言う人が出て、子どもと親とのお金を通じた関係はどうあるべきか、望ましいお金の使い方とは、などが話し合われました。

「若者というのは、親にお金をもらって暮らして、お金を自分のものとしてちゃんと考えて使ってないイメージがあります。そこで子どもに対しての「金銭教育」がどんな形で可能か、ということを考えたときに、親がお金を渡さない、自分で稼がること以外にありえるんだろうか、という気がしてくるのですが・・・。これから、自分なりの金銭感覚を持つことはどういうことか、身の丈にあった暮らしとはどういうものか、ということを巡って話が盛り上がります。」今の大大阪では、最低限住むところがあって、ご飯を食べてということを考えると、15万あればやっているはず、それが最近ラインでは?」という具体的な数字の話を飛び出しましたが、参加者の関心は、「お金を正しく使う」とはどのようなことなのか、という点に集まりました。

「若者が「正しく」お金をつかってないとして、でも望ましいお金の使い方ってなんなんでしょう? 例えば、借金はだめ、とかそういうことなのか?」

「でも、何が良い使い方で、悪い使い方かは、その人の主観的な問題じゃないのかな。」

「自己破産する若者もいるけど、それって、本人が覚悟を持ってしてることでしょ。周りがとやかくいうことじゃないんじゃない?」

「いやいや、その場合は、いわば、お金や欲望に自己に乗っ取られている状態であって、本人の覚悟によってしているとは言えないでしょ。」

参加者たちは、「お金正しく使う」ということは「覚悟」に関係していると考えたようです。さて、「覚悟を持つお金を使う」とはどういうことなのでしょうか。引き続いで対話を耳傾けてみましょう。

「自分が稼げる以上のお金を使う生活していると、失業したり、親がいなくなったりしたときにはその暮らしをつづけていけば、自分が望まない暮らしをおくらなければいけないのに、その覚悟をしていない人がいる。そのことが問題なのではないだろうか?」

「でも、最悪の事態を受け入れる覚悟のない人なんて本当にいるの?」

「覚悟、という点でいうと、結婚をして専業主婦になる人は、夫が病気や怪我をした際に貧しい生活をおくる覚悟をしておかなければならないのかな?」

「でもいくら個人が覚悟をしたからといって、その人が不況で失業したりして貧しい状況になった時には、公の機関はそれを救済すべきではない?」

「たしかに失業のリスクが個人の責任にだけ帰せるというのはおかしいと思うけど、現実問題として自分の望まない生活をおくる覚悟が必要な社会に生きているんだという認識は必要なんじゃないですか。」

「正しい覚悟っていうのが何か、って問題に戻るんですけど、正しい決断や覚悟とそではないものってどうやって区別できるんですかね? ちゃんと考えたかどうか、ってことなのかもしれないんですけど、例えばものすごい考えたけど、どうしてもこのたかーい車が欲しいから買うんだ、という決断は正しいものなんでしょうか?」

「確かに。それで、計画性とか、時間の問題とも関係するんじゃない?」

「でも一、今の時代って、お金とにかく使っている消費に関する情報ばかりがあふれてるでしょ。使うばかりで、『考える』なんてことには若者も含めて関心がないんじゃないかな。消費社会のなかでは合理的な判断なんて不可能なんじゃないかな、という気さえするな。」

「それもう少しがた、消費者金融の金利の法外さや取り立てがひどいとか、簡単な啓蒙をすることは可能なんじゃないですか。」

「覚悟」という言葉に最後は話が集中しましたが、対話の中ではこの言葉は一つに定義されず、様々な角度から話が出ました。振り返ってみると、自立ということが「自分の責任でお金を稼ぐ/使うこと」として全体的に問題になっていたようです。これに対して「決断する」「責任をとる」ことそのものがどういうことであり、どのように可能かを問題にする人もいれば、その一方(稼ぐという文脈で)失業のリスクとその責任、(使うという文脈で)過剰な商業主義や消費者金融といった社会問題との関係を問題にする人もいるという形で、話がさまざまに広がってしまったという印象です。お金と責任ということでここからもう少し問題を限定して掘り下げられればよかったです、参加者の関心の多様さと時間の制限のため、ここでお聞きになりました。

あともう少し話がしたい、というところで時間切れとなつたせいか、問題提起をした方の周りには、話し合い終了後も、ちょうど彼女の子どもくらいの年齢の人達が集まっていろいろ話をしており、哲学カフェが刺激となって新たな交流、対話が生み出されている様子でした。

(進行: 田中俊英、報告: 高橋 緑)

東京

お金の「汚さ」とは何か? What is "dirtiness" of money?

「お金を問う」というテーマにちなんで、六本木ヒルズ界隈で開催することを本気で考えたが、予約の難しさなどから、結局いつもの明治学院大学白金校舎の学生ラウンジで6月17日(土)に開催した。面白い論点をめぐる対話が続いたが、十分深まつた気がしなかつたので、進行役の私からもう一度同じテーマで聞くことを提案し、7月30日(日)に、白金のプラチナ通りにあるイタリアン・カフェ「カフェ・ラ・ボエム」で開催した。

6月17日のカフェには、十五、六人の参加があった。まず、各自のお金にかかる経験を自由に話しながら問い合わせを決めた。お金にまつわる「汚さ」が話題になり、「お金はどこから汚くなるか」という問い合わせを立てた。お金そのものが汚いわけではない、使い方、使う人によって汚くなる、という前提は共有された上で、次のよき論点をめぐって対話は進んだ。

1. 友情、恋愛など純粋なものにお金を介在させる不純さが「汚い」と感じられる。この不純さには二つの場合がある。1. お金は手段とすべきでないところでお金を手段とすること(手段の不適切さ)。2. 精神的なものを物質的なものの優位に置く考え方。

2. 計量化(数値化)できないものを計量化することが「汚い」と感じられる。お金は誰にとっても平等でわかりやすい軽量の尺度。

3. お金は本来手段であるのに目的になることが「汚い」と感じられる。これに対しては、愚かさではあつても汚さではないのではないか、という意見。

4. お金がないひとの「ひがみ」から「汚い」という感覚が生まれる。この「汚さ」には二つの場合がある。

1. お金で負けてるという前提をもつている時点ですでにお金に捉われている。2. 精神的で優位に立つために「汚い」というレッテルを貼る。

5. お金は流通するものなのに、それを隠したり停滞させたりすることが「汚い」。

6. 貪欲に対する戒めとして「汚い」という。貪欲は本人や周囲の人などを不幸にすることが多い。

進行役としては、1、2、4に見られる「汚さ」をもっと掘り下げて考えてみたいと思ったが、時間切れになつた。対話にたいへん面白い局面を与えたのが、2に対する、お金によって「借り」を清算することもできるという意味で、お金は「きれい」な面がある、という反論である。

同じテーマでもう一度カフェを開くことを提案し、「お金の「汚さ」とは何か?」という問い合わせを選んだ。

7月30日(日)のカフェにも、十五、六人の参加があったが、顔ぶれはかなり入れ替わった。一応、前回の対話の論点をまとめたプリントを用意したのだが、前回の対話を継続するというよりも、前回の論点を「刺激」として新たな対話を始める、という感じになつた。それはそれでよかったと思う。その効果か、今回は初参加の男性がまとまつたテーマを披露することで対話の口火が切られた。

テーゼ1: たとえば恋愛を出世のために使うべきではない、というには恋愛をめぐる一種の暗黙のルール。その暗黙のルールに反することは「ざるい」と感じられ、さらに「汚い」と感じられる。同じように、お金にものをいわせて異性を手に入れるのも、恋愛をめぐる暗黙のルールに反するので、「汚い」のだと思われる。しかも、お金はいろいろなものと交換され、誰にとってもわかりやすい尺度なので、汎用性があり、頻繁に使われるし、使われ方もわかりやすい。その分、他のルール違反より見えやすいし、「汚さ」が目立ちやすい。

この明快なテーゼに対しては「お米が汎用性のある社会ではお米が「汚い」ということになるのか?」「言語は最も汎用性のある道具だが、言語が「汚い」と感じられることはない」などの興味深い反論があつたが、進行役はむしろ「暗黙のルール」が破られる例を日常生活から探してみることを提案した。身近に経験されるこれを振り返って見ることで、対話を活性化すると思ったからである。しかし、私の目論見は見事に外れ、「法律的には合法スレスの悪徳コンサルタント」という例があつただけだった。むしろ次の新たなテーゼをきっかけに対話は意外な展開を見せた。

テーゼ2: 暗黙のルールというが、誰がルールだと認めているのか? たとえば「恋愛はハートだ」と信じている男の好きな女を、カッコいいクルマに乗った男がさらって行ったとしたら、ハートの男は「ルール違反だ」と非難するだろうが、クルマの男にとってはクルマで魅了するのがルールである。「暗黙のルール」は、結局、自分が認めたルールのことで、それを知らない奴を「汚い」とかなんとか言うのだ。これに対しては、次のような反論があり、対話は活性化した。

反論1: やはり多くの人々が認める暗黙のルールがあって、それが道德になつたり、法律になつたりする。「ざるい」と「汚い」、「フェア」と「アンフェア」の区別はたんにその人次第だとは思えない。

反論2: そういうのは「ルール」と言えるのか。法律というルールを破れば制裁があるので、暗黙のルールを破っても制裁はない。ルールを破ることは「いけない」になるはずで、「汚い」にはならないはずである。

テーゼ2の擁護: 「多くの人々が認めるルールも、いろんな「各自が認めたルール」のせめぎあいのなかから生まれてくる。汚い」という人は「そななのあり...ひょとしたらありかも?」と、ルールをめぐるせめぎあいに参加している。「いけない

」はルールが明らかで、白黒がはっきりしているとき。「汚い

」は白と黒が混在していて「そななのあり?」「ありえない?」「ありかも?」というときである。

今回は、二つのテーゼを核にして、かなり筋のはっきり見える対話が展開し、一つの興味深い仮説に近づくことができた。もちろん「お金にまつわる「汚さ」」の正体にはまだ手が届いた感じがないが、それにかなり接近するエキサイティングな対話だったと思う。

(進行役、報告: 寺田俊郎)

We held a philosophical cafe in the student lounge on the Shirokane Campus of Meiji Gakuin University on Saturday, June 17. As the dialogue turned out to be quite exciting, we decided to continue the dialogue at an Italian cafe, 'Cafe la Bohem', on Sunday, July 30.

On June 17, we had around 15 participants. We started with choosing the question 'When does money become "dirty"?' The dialogue proceeded around some hypotheses including the following four. 1. When we involve money in friendship or love, we feel impurity and this impurity turns out to be 'dirty'. 2. When we measure something which really cannot be measured with money as a scale, we feel it 'dirty'. 3. When we confuse money, which is a mere means for a given end, with our end, we feel it 'dirty'. 4. The 'dirty' image of money comes from the resentment or envy of those who don't have much money.

On July 30, we also had about the same number of participants but the persons were quite different. We chose the question 'What is "dirtiness" of money?' The dialogue developed around the following two exciting hypotheses.

1. That we shouldn't make use of personal love for our secular success, for example, is a tacit rule about personal love. When someone breaks it, we feel him/her 'dirty'. Now, money can be exchanged with many things and is a very convenient and evident medium. So money is the most likely to play the 'dirty' role of breaking tacit rules.
2. Who recognize and acknowledge the tacit rule? Tacit rules are nothing but rules recognized and acknowledged by only those who believe in the values which support those rules, and for those who don't believe in those values, those rules mean nothing. So the 'dirtiness' about money is nothing but an expression of a feeling 'I don't